

依頼行動の日本語とトルクメン語の対照研究
—教育場面における発話パターンの比較—<https://doi.org/10.5281/zenodo.15569413>**Esenmyrat DADAYEV**筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学研究院
人文社会科学研究群 国際日本研究学位プログラム
博士前期課程

Abstract. *This study explores the cultural differences in requesting behavior between Japanese and Turkmen languages, focusing on the challenges faced by Turkmen learners of Japanese. Requests are essential in communication, varying based on relationships, age, and the burden of the request. While previous research has examined Japanese request expressions, detailed analysis of differences between native Japanese speakers and learners from different linguistic backgrounds is lacking. The study highlights the rapid growth of Japanese language education in Turkmenistan, with learners increasing from around 50 in 2015 to approximately 13,000 in 2023. This growth necessitates effective teaching methods that consider cultural differences in request expressions. The research aims to identify differences in the frequency and order of speech elements in requests, understand the cultural background influencing these differences, and analyze the interlanguage characteristics of Turkmen learners of Japanese. Using a free-response questionnaire, the study finds significant differences in the use of elements such as greetings, titles, and apologies. Japanese speakers emphasize apologies and consideration for the listener, while Turkmen speakers use greetings and titles to show respect. The study proposes integrating explicit instruction, comparative learning, exploratory learning, and meaning-focused approaches to improve teaching request expressions in Japanese.*

Keywords: *Request behavior, cultural differences, Japanese Language education, Turkmen learners, pragmatic analysis*

1. はじめに

言語は単なるコミュニケーションの手段ではなく、文化や社会規範を反映する重要な要素である。特に、依頼行動は対人関係を築く上で不可欠なものであり、発話の仕方が相手に与える印象や関係の維持に大きな影響を及ぼす。依頼はコミュニケーションにおいて非常に重要な行為であり、相手との関係性、年齢、依頼の負担などによって表現方法が異なる。本研究は、日本語とトルクメン語における依頼行動を教育場面に焦点を当てて対照分析したものである。近年、トルクメニスタンでは日本語教育が急速に発展しており、2023年時点で学習者数は約13,000人に達している。このような背景から、両言語における依頼表現の特徴を明らかにし、より効果的な日本語教育への示唆を得ることを目的とした。

1.1 研究の背景

トルクメニスタンにおける日本語教育は 2007 年に始まり、当初は学習者数 50 人程度であったが、2023 年には約 13,000 人まで急増している。この急速な発展に伴い、トルクメン人日本語学習者特有の言語使用上の課題も顕在化してきている。特に、依頼表現は相手との関係性や場面に応じて適切に使い分ける必要があり、学習者にとって習得が困難な項目の一つとなっている。こうした背景から、両言語における依頼表現の特徴を明らかにし、より効果的な日本語教育への示唆を得ることが求められている。

先行研究の理論的基盤

依頼行動に関する研究は、主に Brown & Levinson (1987)のポライトネス理論を基盤として発展してきました。この理論は、依頼という行為が本質的に相手のフェイスを脅かす行為 (FTA) であることを指摘し、異なる文化における配慮の表現方法を分析する枠組みを提供しています。しかし、この理論は西洋的な価値観に基づいており、アジアの言語における配慮の表現方法を十分に説明できていないという批判もある。

異文化間の依頼行動研究

アクドーアン・大浜 (2008) による日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の比較研究は、本研究に最も近い先行研究の一つです。この研究では、トルコ語話者が呼称や挨拶を重視し、相手との関係構築を重視する特徴が明らかにされました。一方、日本語母語話者は謝罪表現を多用し、相手への負担に対する配慮を示す傾向が強いことが指摘されています。しかし、この研究は一般的な場面での依頼行動を対象としており、教育場面特有の特徴については十分な検討がなされていません。

趙 (2021) による日中対照研究は、依頼の負担度が依頼表現の選択に与える影響を意味公式の観点から分析しています。この研究により、依頼の負担度が高くなるほど、日本語母語話者は間接的な表現を用いる傾向が強まることが明らかになりました。しかし、この研究は依頼表現の形式的な特徴の分析に重点を置いており、なぜそのような言語使用の違いが生じるのか、その文化的背景については十分な考察がなされていません。

電子メールにおける依頼行動研究

李 (2004) は、電子メールにおける依頼行動を台日対照研究として行い、依頼行動の展開と依頼ストラテジーを分析しています。この研究では、日本語母語話者が「謝罪→理由説明→依頼」という順序を基本とするのに対し、台湾人学習者は母語の影響により異なる展開パターンを示すことが報

告されています。この研究は、異なる言語背景を持つ学習者の依頼表現における母語の影響を明らかにした点で重要ですが、実際の対面コミュニケーションにおける依頼行動は扱われていません。

本研究の位置づけ

これらの先行研究は、異なる言語間での依頼行動の特徴を明らかにする上で重要な知見を提供しています。しかし、トルクメン語と日本語の依頼行動を対照分析した研究は管見の限り見当たりません。また、教育場面に特化した依頼行動の研究も限られています。本研究は、これらの研究の限界を補完し、教育場面という具体的な文脈におけるトルクメン語と日本語の依頼行動の特徴を、文化的背景を含めて包括的に分析することを目指します。

1.2 研究目的と課題

本研究では、日本語とトルクメン語の依頼表現における発話要素の使用頻度と順序の違いを明らかにすることを第一の目的としている。また、両言語の依頼行動の違いがどのような文化的背景に起因するのかを解明することを第二の目的とする。さらに、トルクメン語を母語とする日本語学習者の依頼表現が、母語と目標言語からどのような影響を受けているのかを分析することを第三の目的として設定した。

2. 研究方法

2.1 調査対象者

本研究では、日本語母語話者 17 名（筑波大学の学部生・大学院生）、トルクメン語母語話者 20 名（トルクメニスタンの大学生）、そしてトルクメン人日本語学習者 13 名（日本語能力試験 N3 以上の学習者）を対象に調査を実施した。調査対象者の選定にあたっては、年齢や教育背景の均質性を考慮し、大学生・大学院生に限定した。

2.2 調査方法

調査方法として、Google Forms を用いた自由記述式アンケートを採用した。教育場面における 4 つの依頼状況を設定し、それぞれの場面での依頼表現を収集した。具体的には、学生が大学院受験に必要な推薦状の執筆を指導教員に依頼する場面、予期せぬ理由により課題の提出締め切りの延長を依頼する場面、授業中に隣席の親しい友人に筆記用具を借りる場面、そして欠席した授業の記録を友人に借りる場面である。これらの場面設定は、教育現場で実際に遭遇する可能性が高く、かつ依頼の負担度が異なる状況を網羅するように配慮した。

3. 研究結果

3.1 発話要素の使用頻度の違い

統計分析の結果、各グループの依頼表現に特徴的な傾向が観察された。日本語母語話者は謝罪表現を多用する傾向が顕著であり、出現率は 80%以上に達した。一方、トルクメン語母語話者は呼称（80%）や挨拶（65%）、気遣いの表現を多用する特徴が見られた。日本語学習者の場合、両言語の特徴を併せ持つ中間言語的な特徴が観察され、特に目上の人への依頼場面では日本語的な謝罪表現と、トルクメン語的な呼称使用が混在する傾向が確認された。

3.2 意味形式の順序パターン

依頼表現の構造分析から、各グループに特徴的な意味形式の順序パターンが明らかになった。日本語母語話者は「謝罪→理由説明→依頼」という順序を基本とし、相手への配慮を前面に出す構造を持つ。トルクメン語母語話者は「挨拶→呼称→気遣い→前置き→理由説明→依頼」という、より複雑な順序パターンを示し、相手との関係構築を重視する特徴が見られた。日本語学習者は「謝罪→呼称→理由説明→依頼」という、両言語の特徴を組み合わせた独自のパターンを形成していることが判明した。

3.3 依頼表現の文化的背景

両言語における依頼行動の違いには、それぞれの文化的背景が大きく影響していることが明らかになった。日本語母語話者は相手への負担や迷惑を強く意識し、謝罪表現を通じて配慮を示すとともに、相手との適切な距離感の維持を重視する傾向が見られた。一方、トルクメン語母語話者は挨拶や呼称を用いて相手との関係性を積極的に構築し、より直接的なコミュニケーションを通じて、相手との距離を縮めることで円滑な依頼の実現を図る特徴が観察された。

4. 日本語教育への示唆

本研究の結果から、トルクメン人日本語学習者に対する教育内容について、重要な示唆が得られた。まず、場面や人間関係に応じた適切な依頼表現の体系的な指導の必要性が明確になった。具体的には、日本語の謝罪表現の使い分け、場面に応じた適切な呼称の使用方法、直接的・間接的な依頼表現の使い分けなどを、文化的背景の違いを踏まえて指導することが重要である。また、両言語における配慮の示し方の違いを明示的に説明し、場面ごとの適切な言語使用を例示するとともに、相手との関係性に応じた表現選択の練習を取り入れることが効果的であると考えられる。

5. 今後の課題

本研究の限界と今後の展望として、以下の点が指摘できる。まず、実際の会話場面における依頼表現の分析が必要である。本研究で用いた自由記述式アンケートでは、実際のコミュニケーションにおける即時的な言語使用を十分に捉えることができなかった。また、被依頼者側の応答も含めた相互作用の検討や、より多様な場面における依頼表現の比較分析も今後の課題として挙げられる。さ

らに、長期的な学習者の依頼表現の習得過程の観察や、教育現場での実践研究の実施、効果的な教材開発とその検証なども必要である。これらの課題に取り組むことで、より効果的な日本語教育の実現が期待される。

参考文献

- アクドーン, P.・大浜, R. (2008) 「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」『世界の日本語教育』18, 45-60.
- 国際交流基金 (2023) 「日本語教育 国・地域別情報 トルクメニスタン」
- 趙丹楠 (2021) 「依頼発話行為に関する日中対照研究：意味公式から見る依頼負担度の影響を中心に」『外国語学研究』23, 57-64.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 上原龍彦 (2022) 「孤立環境における日本語学習者の「学び」を支える日本語教育」『早稲田日本語教育学』32, 1-20.
- 李佳盈 (2004) 「電子メールにおける依頼行動—依頼行動の展開と依頼ストラテジーの台日対照研究—」『言語文化と日本語教育』28, 99-102.

